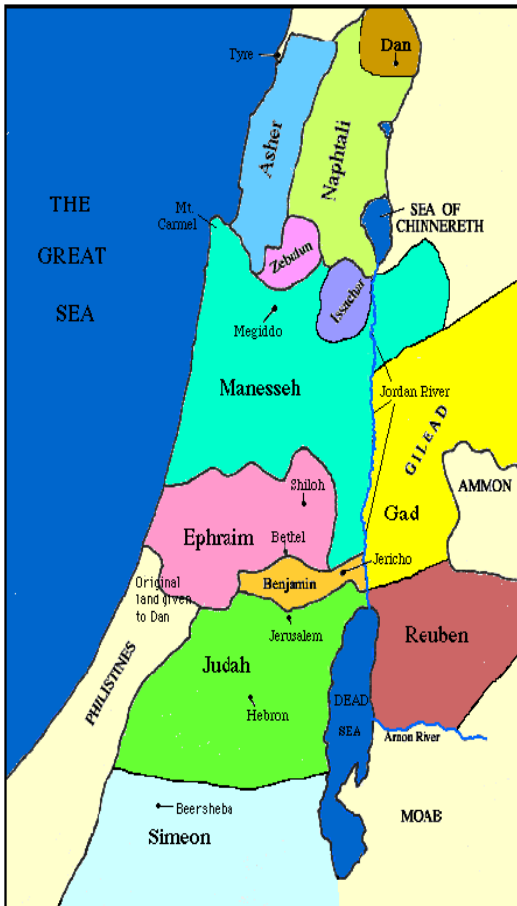


～旧約聖書を読んで感じること～ (34)士師記(1) 嗣業の土地

イスラエルの民はカナンに侵略し、住民を追い払い、土地を奪い、「嗣業の土地」と信じて、定住していきます。もともと住んでいる人々から簡単に許されるわけではなく、絶えず緊張、駆け引き、争いを続けていきます。どうしても追い払うことはできません。ヨシュアの死後は、民全体の求心力、信仰心はなくなりました。嗣業の土地で各部族がそれぞれに闘わなければならず、軍事、民事の指導者として、裁き人、士師を立てました。そして、士師の強い信仰と指導のもとに、各部族が各土地の勢力者と戦いをし、多くの苦しみや犠牲を払いながら、土地を得ていくのです。



長男ルベン族とガド族、マナセの半部族のグループはヨルダン川の東に留まりました。疲れ果て、もう進む気が失せています。定住すると、他の部族とは関わりを持ちたがらず、それなのに、困ると助けを求めずにいられないのです。

指導者カレブを持つユダ族は勇敢で人数も多く、南から、ヘブロン、エルサレムに至るまでの広い土地に住み始めます。南は広大なネゲブで、ユダ族にくっつくようにシメオン族がその中に潜り込みました。その北に、ヨセフの子ども達、ベニヤミン族、エフライム族、マナセの半部族が並んで定住しました。これらの部族が定住した、カナンの中央部のシロには聖所があるため、何事につけ、リーダー的存在となって行きます。

イサカル族、ゼブルン族は更に北のガリラヤ湖にいたる山地に並んで延びます。ガリラヤ湖の西北に、ナフタリ族、海沿いにアシェル族が定住していきます。

ダン族は最初、ユダ族の側にいましたが、そこに定住できず、一番北に住まなければならない事情が出来ました。嗣業の土地を与えられないレビ族の不可解な動きもありました。

士師の中でも、英雄とされているユダ族のオトニエルはアラム人と、ベニヤミン族の**エフド**はモアブ人と、エフライム族の**デボラ**はカナン人と、マナセ族の**ギデオ**ンはミディアン人と、ギレアド(ガド族)人の**エフタ**はアンモン人と、ダン族の**サムソン**はペリシテ人と戦い、勝利をおさめています。



左手のエフド



預言者デボラ



松明を持つギデオ



娘とエフタ



サムソン神殿破壊

士師記を読んで、古代人の戦いは、まるで野生の獣が餌を探すために、縄張りを広げる壮絶な戦いを繰り広げているのと同じだと思わずにいられません。けれどもイスラエルの民は、嗣業の地は神の導きと民の苦闘の賜物と信じて、感謝しているのです。